

MACROCOSM



CONTENTS

- 2 一般財団法人青少年国際交流推進センター 理事長あいさつ／事業計画書
- 4 一般財団法人青少年国際交流推進センター 20年周年
- 6 日本青年国際交流機構(IYEO)会長あいさつ／活動計画
- 8 第12回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」
- 12 タイ王国・スタディツアー 2014
- 14 国際理解教育支援プログラム
- 15 IYEOスリランカ教育支援プロジェクト
- 16 アジア太平洋経済協力(APEC)青年育成事業 APEC Voices of the Future 2013
- 17 第1回薬物乱用防止についての青年リーダーのためのグローバル・フォーラム

マクロコズム

マクロコズム平成26年度第1号(第106号)の 発刊に当たって



一般財団法人 青少年国際交流推進センター
理事長 上村 知昭

平成26年度マクロコズム第1号(通算第106号)は、当センターが設立以来満20年を経過し、21年目に入る時の発行となります。平成6年4月の当センターの設立に深くかわり、無報酬のボランティアではありますが現在当センターの理事長という立場にあるものとして、感慨一入のものがあります。昭和60年に総理府(当時)の青年国際交流事業の既参加者の会が日本青年国際交流機構(IYEO)として一本化された当時から公益法人化の強い要望がありましたが、公益法人としての要件(青年国際交流の公益性、重要性、基本財産5千万円以上と設立後の運営等の資金面)、そして、その頃から公益法人新設への強い抑制が働いたこと等を思い起こすと、よくぞ公益法人新設にこぎつけたなと今更のように思う次第です。私の知る限りですが、その後、総務庁、総理府・内閣府の関係では、新設された公益法人は無いかと思うと誠に感無量のものがあります。設立後、総務庁、内閣府の担当者をはじめ関係各位の当センターの青年国際交流における役割の評価と御理解、そして「IYEO」(その都道府県組織が当センターの団体会員)と密接な連携を図りつつ、関係団体関係各位の絶えざる御支援をいただきながら、役職員一丸となって頑張って参り今日の当センターがあると存する次第です。設立に際し、大変お世話になった関係方面の方々、設立以来今日まで御支援いただいた関係各位に改めて深く感謝と御礼を申し上げます。

また、先般終了した平成25年度の諸事業ですが、内閣府青年国際交流事業(当センターが内閣府との契約により実施(一部を共催)を担当)は、各都道府県そしてIYEOの皆さんが実行委員会の中心となつての御協力により、所期の成果を得て無事終了することができました。皇太子殿下御成婚を記念して始められた国際青年育成交流事業は、第20回(20周年)を迎え、皇太子同妃両殿下の御臨席を仰ぎ記念式典が行われ、殿下からおことばを賜り、事業の成果が披露される等おごそかな中にも大変和やかな雰囲気での式典となりました。そして、当センターの自主事業におきましても、満20年目にふさわしく、25年度第1号(第102号)で申し述べたJENESYS2.0での日ASEAN学生会議を当センターが主催し実施を担当いたしました。ASEAN各国から青少年代表150名(各国から15名)、日本青年代表28名が参加し、日ASEAN特別首脳会議に合わせ12月13日～15日の3日間、東京で開催、その際、安倍昭恵総理夫人がインドネシア大統領夫人をはじめ、ASEAN首脳夫人方を御案内されてお見えになり、各国青少年代表と懇談される等大変意義深いものとなりました。また、ASEAN各国青少年代表の地方プログラム等でIYEOの皆さんには大変御協力をいただきありがとうございました。その他、タイ王国へのボランティア派遣(タイ国内の社会的に恵まれない児童等へのケア)、国際理解教育支援プログラムも前年度の2倍を超える回数を実施、機関誌マクロコズムの発行等による情報提供・啓発等々に相当の成果を得て無事終了することができましたことを御報告いたします次第です。

そして、当センターといたしましては、平成26年度以降も、ますます重要かつ急務となっている「国際化の急進展する時代にふさわしい青年リーダーの育成とこれらの青年の人的ネットワークの形成」という当センター設立の趣旨・目的のため、役職員一丸となり一層頑張って参る所存です。今後とも変わらぬ御支援・御協力をお願い申し上げます、平成26年度第1号発刊に当たっての挨拶とさせていただきます。

平成26年度事業計画書

1 青少年国際交流事業の企画、実施及び協力

- (1) 青少年国際交流スタディツアー
地域での国際交流活動に関心と意欲のある青少年を内閣府の青年国際交流事業既参加青年の組織のある国に派遣し、ボランティア活動への取組や訪問国青年の案内による視察、調査等を行う。
年1回 9日間、参加人数 20人程度
- (2) 国際交流リーダー養成セミナー
国際理解の促進を図るため、国際交流に携わる指導者の養成を行う。
年1回 東京で開催、参加人数 20人程度
- (3) 国際理解教育支援プログラムの実施
内閣府の実施する青年国際交流事業に参加した在日外国青年等を、国際理解教育に資するため、日本の学校に派遣する。
年8回 派遣人数 各3人程度

2 内閣府と共催する青年国際交流事業

- (1) 国際青年交流会議
内閣府主催の「国際青年育成交流」事業の中で、基調講演・テーマに基づいた視察やディスカッションプログラム等を共催で行う。
年1回 東京で開催、参加人数 160人程度
- (2) 日本・ASEANユースリーダーズサミット
内閣府主催の「東南アジア青年の船」事業の中で、日本とASEAN諸国を結ぶネットワークづくりに参加する機会を提供することを目的として共催で行う。
年1回 東京で開催、参加人数 500人程度

3 内閣府等の実施する青年国際交流事業への協力

- (1) 内閣府等の実施する青年国際交流事業への協力
- (2) その他の国際交流事業への協力

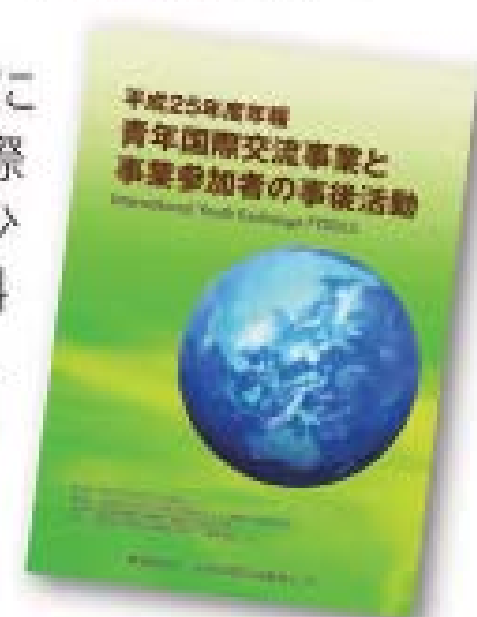
4 青少年国際交流に関する啓発及び研修

- (1) 青少年国際交流全国フォーラム
全国各地域で国際交流に携わる指導者及び青年を対象に、有識者の講演、青少年国際交流活動に関する事例発表・討論等を行う。
年1回 北海道で開催、参加人数 300人程度
- (2) 団体会員のブロック大会(青少年国際交流を考える集い)
全国8ブロックで開催。平成26年度は次の各道県で開催する。
北海道・東北ブロック…北海道* 関東ブロック…茨城県
北信越ブロック…福井県 東海ブロック…岐阜県
近畿ブロック…滋賀県 中国ブロック…広島県
四国ブロック…香川県 九州ブロック…大分県
※青少年国際交流全国フォーラムと同時開催
- (3) 青年国際交流事業報告会
国際交流に関心のある青年を対象に、青年国際交流事業参加者による報告会を行い、国際交流事業への参加を促す。
年3回 東京で開催、参加人数 各250人程度
- (4) 推進委員会議
当センターの幹事推進委員及び都道府県団体会

員の都道府県推進委員の出席のもと、会議を行う。
年2回

5 青少年国際交流に関する出版物の刊行及び広報活動等

- (1) 機関誌の刊行
全国の地域や職域及び海外において行われている青少年国際交流活動の紹介などを中心とした情報誌「MACROCOSM(マクロコズム)」を発行し、都道府県を中心とする関係機関及び一般に配布する。
季刊 15,000部 1回 2,500部 3回
- (2) 年報の刊行
全国の地域や職域及び海外において行われている青少年国際交流活動の実施状況など、青少年国際交流に関する情報や資料を収集、整理した年報を作成し、国際交流実施団体等に配布するとともに、政府刊行物センター等において販売する。
年1回発行 1,300部
- (3) ホームページによる国際交流活動に関する情報提供
① 情報誌「MACROCOSM(マクロコズム)」のホームページ上での公開
② 当センターの概要及び事業案内、各種募集案内等の公開
- (4) その他
青少年国際交流事業に関連する各種資料を作成し、都道府県を中心とする関係機関に配布する。



6 青少年国際交流に関する情報収集及び調査研究

- (1) 青少年国際交流事業に関する情報収集
① 青少年国際交流情報ネットワークの整備
内外の青少年国際交流関係者に関する情報を収集し、ネットワークを整備する。
② 海外における国際交流活動に関する情報収集
関係各国に職員等を派遣し、国際交流に関する情報を収集する。
- (2) 青少年国際交流に関する調査研究

7 青少年国際交流に関する支援・コンサルティング等

- (1) 国際交流活動の推進
全国各地域で行われる青少年の国際交流活動を推進する。
- (2) 活動奨励金の交付
国際交流活動の一層の活性化を図るため、都道府県団体会員に対し、活動奨励金を交付する。
- (3) 青少年国際交流コンサルティング
青少年国際交流事業の実施を希望する団体を対象に、青少年国際交流事業の企画、実施に関する相談に応ずる。
- (4) 国際ボランティア等に関する情報提供
依頼に応じて国際協力、国際貢献に関心のある青少年に対し、国際協力、国際貢献を行う活動団体、活動内容等を紹介する。

一般財団法人 青少年国際交流推進センター20周年

当センターは、昭和34年に今上陛下の御成婚を記念して始められた青年海外派遣・外国青年招へい事業を平成6年の皇太子殿下御成婚を記念し発展的に継承した「国際青年育成交流」事業を始めとする内閣府所管の青年国際交流事業への協力・実施をしています。加えて、これら事業の世界50か国、3万5千人に及ぶ既参加者の事後活動支援、ネットワーク形成等を行うほか、国際交流事業に関する情報提供・啓発、国際交流指導者の養成、海外へのボランティア派遣等の自主事業を行っています。

当センターは、青少年国際交流事業の実施や内閣府の青年国際交流事業への協力等を通じて、各分野において指導的な役割を果たしうる青少年を育成するとともに、これらの青少年による人的なネットワークの形成、青少年国際交流に関する情報提供、青少年の国際交流活動に対する支援等の事業を行い、もって青少年の国際交流の推進を図り、国際化の進展する時代にふさわしい青少年の育成に寄与することを設立の目的としています。また、内閣府青年国際交流事業等の既参加者の事後活動組織である日本青年国際交流機構(IYEO)と緊密に連携(都道府県組織を団体会員とし、本部役員を幹事推進委員、都道府県代表者を都道府県推進委員として委嘱)しつつ、国際交流や地域への貢献活動等の機会を提供し、リーダーシップのある青少年の育成を図っています。以下に、当センター設立から20年間の主な取組内容を記載します。

事業の内容

- 青少年国際交流事業の企画、実施及び協力
- 青少年国際交流に関する啓発及び研修、出版物の刊行、情報収集及び調査研究、支援、コンサルティング等

一般財団法人青少年国際交流推進センター 20年の歩み

年度(西暦)	内容
平成6年度(1994)	「設立発起会」を開催、「財団法人青少年国際交流推進センター設立準備委員会」を設置(3月28日)
	財団設立の許可が下りる(会長:石川 忠雄、理事長:山田 馨司)(4月21日)
	財団事務局の発足(5月1日)／財団設立を登記する(5月2日)
	第1回理事会において評議員を選出、内部規則を制定する／設立記念パーティーを開催(5月20日)
	青少年国際交流スタディツアー実施(フィリピン／ブルネイ・シンガポール) 写真1
	第1回青少年国際交流全国フォーラム開催(東京都晴海ふ頭「ふじ丸」船上) 写真2 ^{※1)}
	第1回・第2回青少年国際理解セミナー開催
	皇太子同妃両陛下の御成婚記念事業として「国際青年育成交流」事業を総務庁が開始、当センターが契約・実施
	国際青年交流会議を総務庁と共催
	SSEAYPインターナショナル第7回総会(日本)関連事業を後援、助成
平成7年度(1995)	機関誌「MACROCOSM」を創刊(年3回発行)
	青少年国際交流スタディツアー実施(フィリピン／韓国)
	第2回青少年国際交流全国フォーラム開催(大阪府)
	第3回青少年国際理解セミナー開催「激変するアジアの中での日本の在り方について」 講師:猪口 邦子氏(上智大学法学部教授)
	第4回～第6回青少年国際理解セミナー開催
	機関誌「MACROCOSM」を発行(以降、年6回発行)
	年報「International Youth Exchange1995」を創刊
	「Japanese Youth Today1995」を発行(～1998)
	日・韓青少年指導者交流(相互交流)を日本青年国際交流機構と共催で実施(～2001)
	「アジア太平洋青年招へい」事業を総務庁が開始、当センターが契約・実施(～2000)
平成8年度(1996)	「戦後50年を記念する集い」における外国人青年招へいを総務府が主催、当センターが契約・実施(天皇皇后両陛下の御臨席を賜る)
	青少年国際交流スタディツアー実施(マレーシア、韓国)
	第3回青少年国際交流全国フォーラム開催(宮崎県)
	第7回青少年国際理解セミナー開催「現在の国際社会において日本が考えるべき新たな視点」 講師:猪口 邦子氏(上智大学法学部教授)
	日・韓青少年指導者交流の招へいを拡大して「日本と韓国の相互理解と友好増進のための交流」実施(～1999)
	第8回～第11回青少年国際理解セミナー開催
	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第4回青少年国際交流全国フォーラム開催(福島県)
	第12回青少年国際理解セミナー開催「アメリカの世紀の終わりの始まり～近代社会の終焉の先にあるもの～」 講師:松尾 弑之氏(第7回「世界青年の船」事業団長)
	「中国青少年指導者等招へい事業」を総務庁が主催、当センターが契約・実施(日中青年国際交流推進会議を開催(石川 忠雄会長の基調講演))
平成9年度(1997)	第13回～第17回青少年国際理解セミナー開催
	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第5回青少年国際交流全国フォーラム開催(徳島県)
	「東南アジア青年の船」第25回記念事業を総務庁と共催で実施(石川 忠雄会長の基調講演)
	第20回青少年国際理解セミナー開催「地球市民を育てる開発教育～参加型社会を目指すNPOの役割」 講師:田中 治彦氏(立教大学教授)
	第18回～第19回、第21回青少年国際理解セミナー開催
	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第6回青少年国際交流全国フォーラム開催(岐阜県)
	「日本・中国青少年親善交流」事業(招へい)、「日本・韓国青年親善交流」事業(招へい)、「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業の国内プログラムを総務庁より当センターが契約・実施
	第22回～第27回青少年国際理解セミナー開催
平成10年度(1998)	第28回青少年国際理解セミナー開催「国際人として…知っておきたい日本の儀礼と作法」 講師:小笠原流礼法宗家小笠原敬承斎氏
	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第11回青少年国際交流全国フォーラム開催(徳島県)
	「東南アジア青年の船」第26回記念事業を総務庁と共催で実施(石川 忠雄会長の基調講演)
	第21回青少年国際理解セミナー開催「地球市民を育てる開発教育～参加型社会を目指すNPOの役割」 講師:田中 治彦氏(立教大学教授)
	第19回～第20回、第22回青少年国際理解セミナー開催
	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第7回青少年国際交流全国フォーラム開催(徳島県)
	「日本・中国青少年親善交流」事業(招へい)、「日本・韓国青年親善交流」事業(招へい)、「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業の国内プログラムを総務庁より当センターが契約・実施
	第23回～第28回青少年国際理解セミナー開催
平成11年度(1999)	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第8回青少年国際交流全国フォーラム開催(徳島県)
	「東南アジア青年の船」第27回記念事業を総務庁と共催で実施(石川 忠雄会長の基調講演)
	第22回青少年国際理解セミナー開催「地球市民を育てる開発教育～参加型社会を目指すNPOの役割」 講師:田中 治彦氏(立教大学教授)
	第20回～第21回、第23回青少年国際理解セミナー開催
	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第9回青少年国際交流全国フォーラム開催(徳島県)
	「日本・中国青少年親善交流」事業(招へい)、「日本・韓国青年親善交流」事業(招へい)、「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業の国内プログラムを総務庁より当センターが契約・実施
	第24回～第29回青少年国際理解セミナー開催
	平成12年度(2000)
第10回青少年国際交流全国フォーラム開催(徳島県)	
「東南アジア青年の船」第28回記念事業を総務庁と共催で実施(石川 忠雄会長の基調講演)	
第23回青少年国際理解セミナー開催「地球市民を育てる開発教育～参加型社会を目指すNPOの役割」 講師:田中 治彦氏(立教大学教授)	
第21回～第22回、第24回青少年国際理解セミナー開催	
青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)	
第11回青少年国際交流全国フォーラム開催(徳島県)	
「日本・中国青少年親善交流」事業(招へい)、「日本・韓国青年親善交流」事業(招へい)、「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業の国内プログラムを総務庁より当センターが契約・実施	
第25回～第30回青少年国際理解セミナー開催	



写真1



写真2

平成12年度(2000)	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第7回青少年国際交流全国フォーラム開催(富山県)
	第29回青少年国際理解セミナー開催「世界で活躍するために身につけておきたい国際マナー」 講師:司 良介氏(マナー文化民俗評論家)
平成13年度(2001)	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第8回青少年国際交流全国フォーラム開催(山口県)
	青年国際交流事業の所管が総務庁から内閣府へ移行。当センターの所管が総務庁から内閣府へ移行
	「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業を内閣府が開始、当センターが契約・実施(～2006)
	第30回青少年国際理解セミナー開催「旅する自転車、100万回のありがとう」 講師:坂本 達氏(株式会社ミキハウス社長室人事勤務、第18回「東南アジア青年の船」事業参加青年) (2002年3月30日)
平成14年度(2002)	青少年国際交流スタディツアー実施(韓国)
	第9回青少年国際交流全国フォーラム開催(神奈川県)
	SSEAYPインターナショナル第15回総会(日本)関連事業を後援、助成
	「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」を内閣府が開始、当センターが契約・実施
	第31回青少年国際理解セミナー開催「国際交流体験をどう活かすか?～ワークショップを通じて～」 講師:中野 民夫氏(ワークショップ企画プロデューサー&会社員)(2003年3月30日)
平成15年度(2003)	「国際青年育成交流」事業(招へい)の一部として「討議セッション」を内閣府が開始、当センターが契約・実施(～2008)
	第10回青少年国際交流全国フォーラム開催(兵庫県)
	第32回青少年国際理解セミナー開催「ODA50年～開発援助の原点を考える～」 講師:松本 悟氏(特定非営利活動法人 メコンウオッチ代表理事)(2004年3月27日)
平成16年度(2004)	青少年国際交流スタディツアー(タイ「For Hopeful Children Project」)に参加開始
	第11回青少年国際交流全国フォーラム開催(佐賀県)
	国際理解教育支援プログラム開始(年6回程度実施)
平成17年度(2005)	第33回青少年国際理解セミナー開催「国際社会における日本の役割について」 講師:猪口 邦子氏(上智大学法学部教授・前軍縮会議日本政府代表部特命全権大使) (2005年3月13日)
	第12回青少年国際交流全国フォーラム開催(宮城県)
	第34回青少年国際理解セミナー開催「人口減少社会を生きるあなたへ～ミレニアム開発目標と日本」 講師:池上 清子氏(国連人口基金(UNFPA)東京事務所所長、第1回「東南アジア青年の船」事業参加青年) (2006年3月21日)
平成18年度(2006)	上村 知昭理事長の就任(2006年3月27日)
	第13回青少年国際交流全国フォーラム開催(香川県)
	第1回国際交流リーダー養成セミナー開催「もっと楽しく、もっと学べる、もっと出会える国際交流プログラムのために」 (2007年3月10日～11日) ³²⁾
平成19年度(2007)	「東南アジア青年の船」事業日本国内プログラムにおいて日本・ASEANユースリーダーズサミットが開始され、内閣府と共催で実施
	第14回青少年国際交流全国フォーラム開催(愛知県)
	日中韓青少年友好会見活動(中国開催)日本参加青年の募集・派遣(外務省と契約)
平成20年度(2008)	第2回国際交流リーダー養成セミナー開催「もっと楽しく、もっと学べる、もっと出会える国際交流プログラムのために」 (2008年3月22日～23日)
	内閣府青年国際交流事業50年記念IYEO/CENTERYE共催プログラム「にっぽん丸クルーズ」開催
	JENESYS平成20年度日中韓青少年交流事業(日本開催)の実施
平成21年度(2009)	第15回青少年国際交流全国フォーラム開催(長野県)
	第3回国際交流リーダー養成セミナー開催「異文化理解促進のためのプログラムづくり～理論、企画・立案、そして実践へ～」 (2009年3月14日～15日)
	青年国際交流50年既参加青年の集いに協力(天皇皇后両陛下の行幸啓を賜る)
	第16回青少年国際交流全国フォーラム開催(広島県)
	JENESYS平成21年度日中韓青少年交流事業(韓国派遣)への日本参加者の募集協力
平成22年度(2010)	天皇陛下御在位20年記念 内閣府青年国際交流事業50周年記念 国際青年交流会議を内閣府と共催で実施
	天皇陛下御在位20年記念 日本・ASEANユースリーダーズサミットを内閣府と共催で実施
	事後活動ニュース(年3号発行)編集の開始 ※事後活動ニュースは平成25年度より年2号発行に変更
	第4回国際交流リーダー養成セミナー開催「地域への貢献に取り組む～地域の在住外国人への支援と交流プログラムづくり～」 (2010年3月14日～15日)
	有馬 朗人会長の就任
平成23年度(2011)	第17回青少年国際交流全国フォーラム開催(埼玉県)
	第5回国際交流リーダー養成セミナー中止(東日本大震災のため)
	いばらぎ若者塾事業(茨城県主催)一部の企画(韓国)、実施
平成24年度(2012)	第18回青少年国際交流全国フォーラム開催(和歌山県)
	第5回国際交流リーダー養成セミナー開催「事業の企画づくりと安全管理～地域の在住外国人との協働プログラムづくり～」 (2012年3月24日～25日)
	SSEAYPインターナショナル設立25周年記念フォーラムを日本青年国際交流機構と共催で実施
平成25年度(2013)	第19回青少年国際交流全国フォーラム開催(沖縄県)
	第6回国際交流リーダー養成セミナー開催「グローバル時代のリーダーシップ～プレゼンテーション能力の向上を目指して～」 (2013年3月30日～31日)
	一般財団法人 青少年国際交流推進センター設立へ移行【会長(理事):有馬 朗人、理事長(代表理事):上村 知昭】
	第20回青少年国際交流全国フォーラム開催(三重県)
	「グローバルリーダー育成事業」を内閣府が開始、当センターが実施・契約
国際青年育成交流事業第20回記念式典を内閣府と共催で実施	
「東南アジア青年の船」第40回記念式典を内閣府が開催、当センターが実施協力	
JENESYS2.0 日ASEAN 学生会議の主催(ASEAN事務局承認)	

注1) 青少年国際交流全国フォーラムは、内閣府の青少年国際交流事業事後活動推進大会とIYEOの全国大会との3者主催で実施されるプログラム(2日間)であり、フォーラムは、第1日目のプログラムを示している。

注2) 平成6年度から開始した「青少年国際理解セミナー」には、平成12年度までは総務庁青年国際交流事業の帰国報告会が含まれている。平成18年度からは名称を「国際交流リーダー養成セミナー」に変更し、1泊2日の国際交流指導者セミナーの位置付けとしている。

Think Globally Act Locally

日本青年国際交流機構会長 佐藤 恵一



この4月から、大河原友子前会長の後任を務めることになりました。どうぞ、よろしくお願いします。

私が国際交流活動を始めたきっかけは、地域での青年団活動の延長線上にありました。行ってみたいかと誘われたのが、ちょうど二十歳の時の「山形県青年洋上大学」。それをきっかけに海外や国際交流活動に興味を持ち、地元で「米沢国際交流青年の会」の設立に参画、留学生など地域の外国人との交流や生活支援などを中心に活動をしていました。その後、国の事業である第20回「青年の船」事業の一般団員として乗船以来、日本青年国際交流機構(IYEO)会員となり、継続して地元で国際交流活動に関わってきました。特に印象深いのは、「日本・中国青年親善交流」事業の中国青年代表団招へいの地方プログラムを受け入れたことが縁で、受け入れた地域の地域と中国との相互交流の橋渡し役をさせていただいたことです。その橋渡しの基には、私たちの組織であるIYEOと中国側のカウンターパートである中華全国青年連合会との間で、しっかりとした信頼のネットワークがありました。そのパートナーシップがあってこそ成し得た相互交流だと思ひますし、その交流が今も地域にずっと根づいていることをうれしく思います。

この度の会長就任にあたり、今までずっと続けてこられた理由は何だろうか考えると、その活動の原点は三つ、地域を良くしたい、たくさんの人とつながりたい、自分を成長させたいとの想いであったと振り返ります。

今年度のIYEO活動方針は、昨年度に引き続き「社会でリー

ダーシップを発揮できる人材育成を目指して」を掲げています。また、今年度はIYEO設立30年の節目を迎えます。今まで活動を支えてくださった先輩の方々、そして毎年新しく加わる若いメンバーと共に、今までの活動の歴史を振り返り、これからIYEOとして何をなすべきかを考えながら、活動方針に沿った具体的なアクションを起こしていきたいと考えています。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から3年、その間ずっとIYEO会員のみならず世界60数か国にも及び各国の仲間と共に、被災地に想いを寄せてきました。これからも、風化させることなく復興支援を続けるべく、今年度新たに「東北ビジット／東北へ行こうキャンペーン!」を行います。また、IYEO会員の地域社会貢献活動への橋渡しを促進する「ボランティアのすすめ(仮)」の具体的な検討も進めていきます。

内閣府並びに一般財団法人青少年国際交流推進センターをはじめ関係団体との連携のもと、全国の会員一人一人が、今できることを考え、未来に向かって行動を起こしていこうではありませんか。

「あなたは 何のために 何を行って どう生きようとしていますか。」

最後に、皆様の御健勝を願うとともにIYEOの発展に尽力していくことを決意して、新任のごあいさつといたします。

I. 活動方針

「社会でリーダーシップを発揮できる人材育成を目指して」

現代のグローバル社会においては、幅広い視野を持って変化に対応した新しい取組を考え、実行できる人材が必要とされている。このような社会のニーズに応えるため内閣府青年国際交流事業で培われた青年育成のノウハウと日本青年国際交流機構で築き上げたネットワークをいかした人材育成に取り組む。

1. 青年層活性化の基盤づくりに取り組もう

青年の社会活動へのニーズを把握して、青年の活動の場作りと環境整備に取り組むべく、国に対して青年施策についての提言を積極的に行う。同時に、自団体の活動内容を見直すとともに他団体との連携に取り組み、青年層の活性化を図って、青年による社会の活性化を目指す。

2. 地域社会に貢献できる人材育成に取り組もう

地域における国際交流活動を積極的に行い、地域と世界の距離を狭めるとともに、地域のニーズに合った貢献が果たせる人材の育成に努める。

3. 国際ネットワークをいかした国際協力活動に取り組もう

国内外における様々な課題に対応するため、半世紀にわたって築いたネットワークを活用して国際協力活動を推進し、社会に貢献していく。

II. 主な活動分野

第1分野： 地域における国際交流活動を基本にした人材育成

- (1) 短期の海外派遣事業
- (2) 国際理解を深める勉強会やワークショップなどの研修プログラムの開催
- (3) 小中学校の国際理解教育への協力
- (4) 在住外国人への支援活動
- (5) 地域の人々と在住外国人との交流プログラム
- (6) 内閣府青年国際交流事業報告会の開催

第2分野： 国際交流事業受入れへの協力及び自主事業による外国青年受入れ／派遣

- (1) 青年国際交流事業へのプログラム内容の提言
- (2) 行政・団体等との連携による地元青年を含めての受入実行委員会の組立て
- (3) ホームステイのアレンジ
- (4) 地域産業並びに多様な分野との連携による外国青年の日本理解促進
- (5) 団体及び大学との連携によるディスカッションプログラムの組立て

第3分野： 国際協力活動

国内外で起きる災害や諸問題に対して、各国の事後活動組織と連携して問題解決に向けて取り組む

第4分野： 青少年分野についての活動の啓発

- (1) 全国の会員からの意見をまとめて、国の子ども・若者施策に対して提言書を提出
- (2) 国及び地方自治体の青少年に関する法律及び条例の普及・啓発への協力
- (3) 若者の人材育成並びに意識啓発を目的とした独自の自主事業への取組
- (4) 社会活動の推進
- (5) 青少年分野にかかわる公的な場への人材推薦及び積極的発言
- (6) 他団体との連携

第5分野： 広報活動への積極的取組

- (1) 内閣府青年国際交流事業募集広報への協力
 - ① 年間を通しての広報活動の工夫
 - ② 事業報告会及び事業説明会の開催
 - ③ 大学での事業説明会への協力
 - ④ 企業への働きかけ
- (2) 団体をアピールするための広報
 - ① 内閣府青年国際交流事業との連携を分かりやすく示す
 - ② 独自の自主事業をまとめて対外的にアピールできるよう組み立てる
 - ③ インターネット広報の充実

第6分野：都道府県IYEO及び会員のネットワーク強化と啓発活動

- (1) 全国大会、ブロック大会（青少年国際交流を考える集い）などの開催
- (2) 都道府県IYEO役員研修の開催
- (3) ブロック内IYEO間の連携強化の取組
- (4) 各事業の既参加者の縦のつながりを促進する取組による国内ネットワーク強化
- (5) プリテンボード発行などによる会員間の情報共有
- (6) 会員情報の把握強化

第7分野：内閣府青年国際交流事業の外国参加青年とのネットワーク

- (1) 「東南アジア青年の船」事業のASEAN各国事後活動組織との国際連携組織(SSEAYPインターナショナル)
 - ① SSEAYPインターナショナル総会の開催
 - ② 共通連携活動の取組
 - ③ SSEAYPインターナショナル事務局担当国としての対応
- (2) 「世界青年の船」事業参加46か国の事後活動組織との国際連携組織(SWYAA)
 - ① SWYAA国際大会の開催
 - ② 共通連携活動の取組
 - ③ SWYAA事務局としての対応
- (3) 中華全国青年連合会を基本にした「日本・中国青年親善交流」事業の中国既参加青年との連携
 - ① 中国との交流プログラムの推進
- (4) 「日本・韓国青年親善交流」事業の韓国既参加青年との連携
 - ① 「日韓交流連絡会議」の開催
- (5) 「国際青年育成交流」事業の交流国であるヨルダンとドミニカ共和国とのネットワーク形成
- (6) 「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」のネットワーク形成

第8分野：財政基盤の確立

将来を展望した運営と財政基盤確立を目指した、財政強化検討チームの立ち上げ

Ⅲ. 本部における活動計画

1. 全国大会の開催

第30回全国大会北海道大会 日程:平成26年11月22日(土)～23日(日)
開催地:北海道

2. 全国推進会議の開催

第60回全国推進会議 日程:平成26年11月21日(金)～22日(土)
開催地:北海道

第61回全国推進会議 日程:平成27年2月14日(土)～15日(日)予定
開催地:東京都

3. ブロック大会(青少年国際交流を考える集い)

平成26年度中に8ブロックにおいてブロック大会を開催する。今年度北海道・東北ブロックについては、全国大会と同時開催とする。

ブロックごとに活動方針に沿ったテーマを設定し、ブロック大会開催の際に掲げて、会員の活動についての共通認識の形成と意識高揚に資する。

4. 東日本大震災の被害からの復興活動への取組

平成23年3月11日(金)に発生した「東日本大震災」による被害への復興支援を継続的に行うべく、岩手県、宮城県、福島県を中心とした被災地のニーズを把握し、都道府県IYEOとの連携を強化して進めていく。

- (1) 東北ビジット/東北へ行こう！キャンペーン
- (2) 東日本大震災復興支援のための募金活動
- (3) 継続支援を行う地域のニーズの明確な把握、効果的な支援への取組
- (4) 国際交流の視点を取り入れた活動を、被災地において積極的に展開
- (5) ホームページ等で世界や全国からのメッセージや活動内容の発信

5. 国際並びに国内支援活動

- (1) インドシナ津波被災国であるスリランカへの支援(スリランカ教育支援プロジェクト)を始めとする「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA)における国際支援活動の継続
- (2) インドシナ津波被災国であるタイ、インドネシアへの支援、並びにタイの「For Hopeful Children Project」への支援活動を始めとする「東南アジア青年の船」事業事後活動連携組織(SSEAYPインターナショナル)における国際支援活動の継続
- (3) 事後活動組織の国々においての災害に対して、各国事後活動組織との連携による支援
- (4) 各都道府県においての災害に対して、都道府県IYEOとの連携による支援

6. IYEO設立30周年記念に向けた事業の取組

設立20周年記念を機に取り組んだ事業を継続しつつ、30周年に向けた企画・立案及び推進

7. 青少年分野についての意識の啓発及び具体的な活動の推進

- (1) 子ども・若者施策への提言
- (2) 青年のリーダーシップの向上や社会への参画意識を高める

ことができる内容及び異文化理解を促進する内容の自主事業の企画・運営

- (3) 子ども・若者育成支援推進法の普及・啓発への協力
- (4) 各種青少年国際交流事業へのリーダー推薦及び公的委員会等への人材推薦
- (5) 他分野、他団体との連携活動の推進(共催、後援、協力)
- (6) 社会活動(ボランティア活動)の啓発・促進
 - ① 「自主活動サポート助成金制度(チャレンジ・ファンド)」
 - ② 「ボランティアのすすめ(仮)」

8. 平成26年度、27年度内閣府青年国際交流事業募集広報への協力並びに団体としての広報活動強化

IYEOの社会活動団体としての活動実績を明確にアピールし、非営利団体としての社会的役割を広く知らしめるための広報活動に力を入れるとともに、内閣府青年国際交流事業の充実を図るために、参加者募集広報活動の協力に重点をおいて取り組む。

- (1) 事業広報
 - ① 年間を通しての広報活動の工夫
 - ② 事業報告会及び事業説明会の開催
 - ③ 大学での事業説明会への協力
 - ④ 募集パンフレットの配布先の開拓
 - ⑤ マスコミへの紹介
 - ⑥ 企業への事業説明
 - ⑦ その他、効果的な広報活動を検討し推進
- (2) 団体広報
 - ① 「はじめてのIYEO」の活用
 - ② IYEOライブラリーの開設
 - ③ ソーシャルメディアの活用
 - ④ その他、効果的なツールの活用への取組

9. 都道府県IYEO役員研修の開催

都道府県IYEOで事務局を担当する役員メンバーから代表者を集めて、実務研修を行う。

都道府県IYEOの活動基盤の充実を図ることにより、全国組織としての組織基盤の確立を目指して人材育成の一環として行うものである。

日程:平成26年6月14日(土)～15日(日)(一泊二日)

開催地:東京都

10. 海外とのネットワーク

- (1) SSEAYPインターナショナル第26回総会の開催
(日程:平成26年4月25日(金)～4月28日(月) 開催国:マレーシア)
- (2) 「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA)国際大会の開催
(日程:平成26年8月30日(土)～9月3日(水) 開催国:トルコ)
- (3) 中華全国青年連合会を基本にした「日本・中国青年親善交流」事業の中国既参加青年と連携
- (4) 「日本・韓国青年親善交流」事業の韓国既参加青年との連携(第11回「日韓交流連絡会議」の開催
日程:平成26年8月22日(金)～24日(日) 開催国:韓国)
- (5) 「国際青年育成交流」事業のネットワーク形成に向けた調整
国内におけるAir-Net Dayの開催などを軸におきながら継続的派遣国を中心に発展
- (6) 「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」のネットワーク形成に向けた調整

11. 国内ネットワークの強化

- (1) 各事業直後の全体での事業報告会の開催(年3回)
内閣府及び(一財)青少年国際交流推進センターと共催
 - ① 「グローバルリーダー育成事業」報告会
平成26年7月6日(日)
 - ② 平成26年度航空機による青年海外派遣報告会
平成27年2月8日(日)
 - ③ 第41回「東南アジア青年の船」事業報告会
平成27年2月22日(日)
- (2) 事業毎の国内ネットワークの自主的強化
 - ① 第8回Air-Net Dayの開催(平成26年度 調整中)
 - ② 「日本・中国青年親善交流」事業関係者による中国同窓会の開催
 - ③ 各事業関係各国大使館への訪問
 - ④ 「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」既参加者の情報交換会の開催
- (3) 会員情報の把握強化
「IYEO会員データプロジェクト」の継続

12. 事後活動「Bulletin Board」の発行

年4回(全体発送と全国大会案内、事後活動ニュースの発送時に同封)発行

都道府県IYEOの連絡文書発行に協力(A4両面スペースに都道府県またはブロックごとに印刷して全体送付の際に同封)

13. 財政基盤の確立

会員に対しての呼びかけを含め、継続的な寄付金収入の確保に努める

財政強化検討チームを立ち上げ、具体的な財政基盤の強化に努める

第12回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」

平成14年度に開始された青年社会活動コアリーダー育成プログラムでは、高齢者、障害者及び青少年の各関連分野における社会活動の経験者を海外に派遣し、その国でこれらの分野で重要な役割を担っている民間組織等のリーダーを日本に招へいするという相互の交流を通じ、社会活動の青年コアリーダーの能力の向上と相互のネットワークの形成を図っています。

派遣・招へいプログラム共通の総合テーマ
 高齢者関連活動：生きがいのある高齢者の生活
 障害者関連活動：障害者の社会参加のための支援
 青少年関連活動：ユースワーカーの育成の在り方

派遣事業	平成25年 10月13日～21日	派遣先：デンマーク（高齢者関連活動）、ニュージーランド（障害者関連活動）、英国（青少年関連活動）に9名ずつ 派遣者は、招へいプログラムの各種実行委員として受入れに協力
招へい事業	平成26年 2月25日	招へい青年来日 デンマーク、ニュージーランド、英国から、三分野38名の青年リーダーを招へい
	2月26日	開会式、基調講演、政府職員による講義、歓迎レセプション
	2月27日～3月2日	NPOマネジメントフォーラム 総合テーマ「ボランティアの育成～ボランティアの力を発揮するには」 2月27日<課題別視察> NPOマネジメントフォーラムのディスカッションテーマ（トピック1～3）に即した施設を訪問し、実際の現場の視察及び関係者との意見交換を実施 【トピック1：ボランティアのリーダーの育成】 訪問先：公益財団法人修養団、社会福祉法人つくりっこの家 就労継続支援B型「つくりっこの家クラブハウス」 【トピック2：ボランティア・ネットワークの構築、連携】 訪問先：公益財団法人さわやか福祉財団、特定非営利活動法人高津総合型スポーツクラブSELF 【トピック3：ボランティアの発掘と活動の継続】 訪問先：多世代交流型コミュニティ事業実行委員会、社会福祉法人江東園 2月27日～3月2日 上記総合テーマ及びトピック（1～3）に基づき、日本の非営利団体関係者と共に討議を実施
	3月3日	自主研修・日本文化体験
	3月4日～9日	地方プログラム 鳥取県：【高齢者関連活動】 広島県：【障害者関連活動】 山形県：【青少年関連活動】
	3月10日	コース別発表会、成果評価会、修了式、歓送会
	3月11日	招へい青年帰国

地方プログラム

地方プログラムでは、関連活動(コース)ごとに分かれ、鳥取県(高齢者関連活動)、広島県(障害者関連活動)、山形県(青少年関連活動)を訪問し、コーステーマに沿ったプログラムを実施しました。

鳥取県(高齢者関連活動)のテーマは、「認知症高齢者が住み慣れた町で暮らし続けていくための啓発と連携～家族・住民・団体・行政で支えあう地域づくり～」で、それぞれの介護度の段階で、認知症に関する啓発や支援体制について、訪問先とセミナーで話し合いました。発症時には早期に適切な相談窓口や専門機関へつながることができるネットワークが必要、介護負担を軽減するために福祉テクノロジー導入を検討する必要性など、各国の事例を元に今後の新たな取組の可能性について議論しました。

広島県(障害者関連活動)のテーマは、「障害者の社会参加のための支援「自分らしさが実現できる地域づくり～就労の観点から～」とし、中小企業による障害者雇用が推進されている広島県で、障害者が自ら選択し、就職を視野に入れた職業訓練の機会が与えられるには、行政・教育機関・企業・団体などが協力して、積極的に地域に働きかけていくことが必要と話し合いました。

山形県(青少年関連活動)のテーマは、「青少年団体における組織マネジメント力のあるリーダー育成のための取組」とし、青少年の支援・育成のために活動している非営利団体や地域コミュニティが、持続可能な組織力(地域力)を向上させるために、次世代を担うリーダー育成にいかに関わりあうかに焦点を当て、情報交換とディスカッションを行いました。

各訪問県では、関連施設を訪問し、非営利団体及び各分野の関係者と共に地方セミナーを開催しました。

鳥取県(高齢者関連活動)

平井伸治鳥取県知事を表敬訪問する



有限会社ケアサービス米子鳥取ふれあい共生ホーム照陽の家を訪問し、職員及び地域ボランティアと意見交換する

3月4日(火)	平井伸治知事表敬訪問、福祉保健部長寿社会課による講義、歓迎会
3月5日(水)	社会福祉法人敬仁会地域ケアセンター「マグノリア」、琴浦町地域包括支援センター訪問
3月6日(木)	有限会社ケアサービス米子 鳥取ふれあい共生ホーム照陽の家訪問
3月7日(金)	地方セミナー
3月8日(土)	振り返り、ホームステイ
3月9日(日)	ホームステイ、歓送昼食会

NPOマネジメントフォーラム2014

「NPOマネジメントフォーラム」は、高齢者・障害者・青少年の三つの分野の非営利セクターで活躍する日本と諸外国の青年が一堂に会して、各国のNPO事情や活動事例に基づく有益な情報を共有し、実践的な意見交換を通じてNPO運営に関する能力の向上を図り、それぞれの分野において社会活動を支え、その中心的な担い手となる青年リーダーを育成することを目的として実施しています。

非営利セクターの活動の拡大・充実には、ボランティアの力が不可欠です。また、ボランティアの活動が、課題解決の大きな力となります。その力を最大限に引き出すために非営利団体が取り組むこととして、ボランティアの発掘・育成だけでなく、ボランティアのリーダーとなる人の育成や、ボランティア活動を幅広く支援するネットワーク・つながりを強化することで、ボランティア活動に継続的にかかわる人材の育成を目指し、平成26年2月27日(木)から3月2日(日)に実施されました。情報共有や意見交換の成果は、参加者が「NPOマネジメントフォーラム2014宣言文」としてまとめました。

【総合テーマ】

ボランティアの育成～ボランティアの力を発揮するには

【ディスカッション・トピック】

1. ボランティアのリーダーの育成
2. ボランティア・ネットワークの構築、連携
3. ボランティアの発掘と活動の継続

※ ボランティアは、「労働に対する対価を受け取らず、自らの力を自発的に社会の活動のために発揮する人」。

※ NPOマネジメントフォーラム2014で取り上げるボランティアのリーダーは、自身もボランティアとしてかかわる人。職業としてのリーダーではない。



広島県（障害者関連活動）



広島県立障害者リハビリテーションセンター障害者支援施設あけぼのにて、職員からリハビリテーションプログラムの説明を受ける

地方セミナーにて、障害者の就労を取り巻く自国の現状、取組、課題について発表する外国参加青年



3月4日(火)	環境県民局長表敬訪問、健康福祉局障害者支援課による講義、歓迎会
3月5日(水)	広島県立障害者リハビリテーションセンター障害者支援施設あけぼの、社会福祉法人もみじ福祉会第三もみじ作業所訪問
3月6日(木)	広島市立広島特別支援学校、エフビコ愛バック株式会社広島工場訪問
3月7日(金)	地方セミナー
3月8日(土)	振り返り、ホームステイ
3月9日(日)	ホームステイ、ホストファミリーとのお別れ会

山形県（青少年関連活動）



松田一彦山形県置賜総合支庁長を表敬訪問する



地方セミナーにて、非営利団体の財政について意見交換する

3月4日(火)	置賜総合支庁長表敬訪問、子育て推進部若者支援・男女共同参画課による講義
3月5日(水)	特定非営利活動法人With優訪問、歓迎会
3月6日(木)	特定非営利活動法人きらりよしじまネットワーク、山形県立置賜農業高校訪問
3月7日(金)	地方セミナー
3月8日(土)	ホームステイ
3月9日(日)	ホームステイ、振り返り

NPOマネジメントフォーラム2014 宣言文

「ボランティアの育成～ボランティアの力を発揮するには」



現代社会は、持続可能な共生社会の実現といった理想が語られる一方で、より複雑になり様々な問題を抱えて、従来の仕組みでは解決しきれない状況がおきています。その結果、社会の隙間に取り残される人々を多く生み出しています。

本フォーラムの実行委員会は、これらの様々な課題解決のために、非営利団体こそ力を発揮できるはずであり、果たすべき役割があると考えました。

そして、2012年と2013年の本フォーラムの成果を基にした具体的活動の展開を考えていくためには、人材育成の論議の必要性を認識し、団体のスタッフと協力して大きな役割を果たすボランティアの立場で活動する人々の育成に焦点を当てました。

そして、今回のフォーラムに参加したデンマーク、ニュージーランド、英国及び日本の参加青年は、持続可能な共生社会の実現を目指して、非営利団体が、行政、市民及び企業との連携を深め、ニーズに応じた発展的な協働を展開していくことは、これからの社会に必須であることを理解しました。さらに、このような関係を築き、持続可能な共生社会の実現に有益な場を作り上げていくためには、団体のスタッフの育成に加えてボランティアの多くの人材を発掘、育成していくことの重要性について共通認識を持ちました。

NPOマネジメントフォーラム2012、2013の成果を引き継いで

2012年のフォーラムでは、非営利団体が果たすべき役割はより広範囲になっており、それらの役割を担うにあたっては、行政との連携が必須であり、パートナーシップや役割分担、課題への共通認識、信頼関係をもとにした具体的連携策の実行が必要であること。また、そのような方向性に、非営利団体自らが働きかけていくことの重要性が宣言されました。

また、2013では、非営利団体は、共生社会の実現のために、行政との連携を基本にしつつ、地域住民・企業・他の非営利団体との連携が必須であると考え、特に、地域に焦点を当て、足元からの基盤づくりを行っていくために、「団体の理念を達成するための地域における連携強化」をテーマに取り組みました。

そして、社会の構成員としての地域住民、経済活動の中核を担う企業、それぞれの目標を持って課題解決に取り組む他の非営利団体という三者との密接な連携関係を築いて協働してい

くには、以下の3点が重要であると認識されました。

- 第一に、対等なパートナーシップの考え方で、コミュニケーションを取り合う。
- 第二に、継続的な関係を構築し、互いに益がある発展的な連携を目指す。
- 第三に、非営利団体には、行政も含め、住民、企業、他の非営利団体をつなぐ役割があることを認識する。

NPOマネジメントフォーラム2014の取組

非営利活動に貢献できるボランティアの人材を幅広く育成していくためには、非営利団体としての取組だけでは不十分であり、国や地方行政によるボランティア育成制度の創設や資金援助の仕組み及び企業からの協力が不可欠であると考えます。

このフォーラムでは、そうした行政との連携や企業との協力の必要性を認識しつつ、非営利団体自らが取り組むべきボランティアの人材育成について論じました。

始めに、ボランティアの人々に自らの団体が目指す目標を実現するための力となってもらうためには、彼らは単なる助力者ではなく、パートナーとして共に手を携えていく存在であることの共通認識を持ちました。

そして、彼らの力量や能力の向上が、団体の活動を広げ強化できる力となることを理解し、育成することの重要性を論じました。また、ボランティアの立場のリーダーの存在は、活動への直接的強化だけではなく、人的ネットワークの広がりに対応できる力となることを認識しました。

具体的には、次の3トピックに分かれて、ボランティア活動を志す人々を大切にして活動の成果に繋げていくには、どのような取組が必要かを話し合いました。以下に、トピックごとの成果を示します。

【トピック1～ボランティアのリーダーの育成】

質の高い理念に基づいた戦略的な運営上のリーダーシップを創ることは、非営利団体を成功に導くための重要な要素です。重要なことは、ボランティアリーダーには、様々な段階や特徴があることを初めに認識させることです。それぞれのボランティアリーダーに求められる技能や資質が多様であるため、一つの形が誰にでも当てはまるとは限りません。すべての段階のリーダー育成に共通していることは、団体の目指す理念を連

成するために必要なリーダーシップ能力を、ボランティアリーダー一人一人が育成できる継続的な環境が不可欠であるということです。

団体がこの枠組みを創り出す手段、研修や戦略的な取り組みは、国や団体、そしてそれぞれの特質に応じて異なります。

ボランティアリーダーには、下記の極めて重要な三つの育成サイクルを活用、推進し、団体の精神と特質を発展させ続ける技能が必要です。

1. 団体の理念、評価の過程、リスクの明確化、課題や新しい機会を振り返る
2. 革新的なアイデアの創造、問題を解決し、正しい判断をする
3. 知識やアイデアを共有し、他のボランティアに働きかけ、ボランティアを巻きこみ、受益者と社会に価値を提供する

【トピック2～ボランティア・ネットワークの構築、連携】

私たちは非営利団体間の連携が、共生社会の確立と強化に不可欠と考えます。

共生社会の実現のためには、団体間の連携による人的資源や情報などの共有を通じた相乗効果を活用し、効果的にボランティア・ネットワークを機能させ、持続可能な連携を創造しなければなりません。

そこで、私たちは実行を目指して、持続可能な団体間の連携のプロセスを以下に特定しました。

1. 受益者のニーズを特定
2. ニーズの調査・研究
3. ビジョンの設定と受益者と供給者を合致させる仕組みづくり
4. 仕組みづくりに必要な資源の投入
5. ボランティアに対するトレーニングとコーディネーションに基づく実践
6. 仕組み及び活動成果の評価

これらのプロセスを実行することは、必ずしも容易ではないが、連携の成功のためにはシームレスなコミュニケーションが必要であると認識しました。

最後に、連携のあらゆる段階で、受益者とボランティア双方において、利益及び貢献が供給される必要があるということを確認しました。

ニーズが行動を喚起し
 連携によって行動が拡がり
 連携がインクルージョンを育て
 インクルージョンが共生社会を創る

【トピック3～ボランティアの発掘と活動の継続】

ボランティアの発掘と活動の継続のために、団体はボランティアの募集と支援の明確なモデルをつくらなくてはなりません。

私たちがディスカッションを通して、共通した必要条件は以下のものと考えます。

- 私たちの団体はビジョンを明確に持ち、ボランティアに何を

期待するのかはっきりと示すと同時に、ボランティアのニーズに耳を傾けることが必要です。

- 統一性があり且つ柔軟なプロセスを確立し、それをスタッフ、ボランティア、受益者にしっかりと伝えることが必要です。
- ボランティアの明確な役割を理解し、その役割に適した人材を探すことに積極的に取り組むことが必要です。
- コミュニケーションを最優先させることが必要です。
- ボランティアに対して、時間をかけ、投資をおしまず、有効な研修を提供し、彼らの成果に対して感謝を示すことが必要です。
- 他団体やボランティアなどすべての関係者とともに対等に取り組むことが必要です。

上記の取組と理念により、以下のような成果がもたらされると確信しています。

- 団体の効率性と専門性が改善され、活動内容により良い変化をもたらし、私たちが働きかけることで地域を変えることができます。
- ボランティア活動が有意義であると評価され、ボランティアに取り組む意欲が高まります。
- ボランティアの成長を継続的に支援し、責任の範囲を少しずつ広げることにより、自分の技量を発展させ、成熟したボランティアが育ち、自らキャリアと専門性をさらに磨き上げる機会を得ます。

以上の取組を進めていくに当たって、非営利団体は、次の二つの考え方をもち、団体自身がすべての活動に積極的に取り組んでいくことが必要です。

ボランティアの人々の社会に貢献したいという意欲を大切に、彼らの様々なニーズに対応していくために、常に幅広い視野を持ち新しいアイデアと新しい活動やシステムを作り出す力をつけ、それによって、彼らと団体の理念を共有してパートナーとしての連携を作り、活動成果を築いていきましょう。そして、ボランティアの人々と協力して、常に社会的影響力を広げる努力を行い、団体の理念とアイデア、活動を社会にアピールしていきましょう。

最後に、私たちは、本フォーラムで得た成果を自国へ持ち帰り、ボランティア人材育成に尽力し、それぞれの地域社会において、目指す社会の実現に向けて、非営利団体が核となって推進していけるように努力します。

NPOマネジメントフォーラム2014参加者一同



タイ王国・スタディツアー2014

一般財団法人青少年国際交流推進センターの自主事業「タイ王国・スタディツアー2014」が、平成26年3月17日～25日に実施されました。

大学生と社会人を含む12名の参加者と2名の同行職員の合計14名は、青少年健全育成プロジェクト「For Hopeful Children Project (FHCP)2014」にボランティアスタッフとして参加しました。タイの「東南アジア青年の船」事業既参加者が、自身のネットワークをいかし始めた慈善事業で、孤児や障がい児など、社会的に恵まれない状況にある子供を「希望あふれる子供たち(Hopeful Children)」と呼び、彼らをタイの海軍施設に招いてキャンプやアクティビティ、海水浴等を行います。

FHCP参加に先立ち、児童養護施設を訪問し子供たちの普段の生活環境を知るとともに、交流や日本文化紹介を行いました。日本からの参加者は、「当初は子供たちのキャンプをサポートする活動だけだと思っていたけれど、参加してみて、非常に大勢の人の厚意でこれだけの規模の活動が成り立っていることに驚き、自分も何か役に立ちたいと強く思った」と述べ、帰国後は地元で今回のスタディツアーの報告会を開催し、この活動について広めたいと語っていました。



Funds for Friends及びタイ王国海軍司令部との連携によるFor Hopeful Children Project (FHCP)2014の広報ポスター



FORDECの子供たちと



児童養護施設「子供の村学園ムーバーンデック」にて子供たちと

月日	活動内容
3月17日(月)	バンコク集合
3月18日(火)	カーンチャナブリー県へ移動 子供の村学園ムーバーンデックでの活動 子供たちと交流 施設内のゲストハウス(伝統的高床木造住居)に滞在(2泊)
3月19日(水)	タンマヌラック・子供の村学園ムーバーンデックでの活動 タンマヌラックにて、子供たちと交流・施設見学 子供の村学園ムーバーンデックにて、職業訓練ワークショップ参加、子供たちとの交流会・文化紹介
3月20日(木)	サムットプラークカーン県(バンコク郊外)へ移動 FORDECでの活動 FORDECデイケアセンターにて子供たちと交流、子供たちの自宅(低所得層家庭)訪問
3月21日(金)	チョンブリー県へ移動 FHCP2014タイボランティアスタッフと顔合わせ、事前ミーティング、FHCP2014事前準備
3月22日(土)	FHCP2014 開会式、海水浴、参加各団体のパフォーマンス披露
3月23日(日)	FHCP2014 軍用船に乗船、アスレチック体験、サンゴ植え付け、ブース別ワークショップ活動(日本文化紹介)、海水浴、参加各団体のパフォーマンス披露
3月24日(月)	FHCP2014 閉会式 バンコクへ移動、夕食会
3月25日(火)	バンコクにて解散



尼僧により設立された児童養護施設タンマヌラックにて、子供たちと交流する



FORDECの子供たちと牛乳パックの「ぶんぶんごま」で遊ぶ日本参加者



ムーバーンデックでの川遊び

For Hopeful Children Project (FHCP)2014 (希望あふれる子供たちのためのプロジェクト)

1991年に始まったFHCPは、今年24年目を迎えます。サッタヒーブ海軍基地にて実施された本プロジェクトには、孤児院や盲学校、タイ北部山岳民族の子供たちなどを養う児童養護施設など、タイ全土9施設から1,200名以上の子供たちが集まりました。子供たちはこのキャンプに参加することを大変楽しみにしており、中には海を初めて見る子もいました。プロジェクト運営には、子供たちをサポートするタイのボランティアスタッフに加え、シンガポール、フィリピン、ラオス、クエートそして日本からのスタディツアー参加者を含む、総勢100名のスタッフが協働する一大プロジェクトとなりました。

期間中はタイ海軍によるパラシュートのデモンストレーションや軍用船体験の他、海水浴や各施設によるワークショップ、地元企業の協賛による屋台等が出ました。日本参加者もブースを出展し、手作り感あふれるゲームなどを通じ文化紹介を行うとともに、ソーラン節やパントマイムを披露しました。

本プロジェクトは来年25年目を迎えます。本プロジェクトの創始者Visit Dejkumtorn氏は、来年は、当センターを含む世界各国の団体等と協力して、25年の節目を記念するにふさわしいプログラムを実施したいと述べています。

■今回訪問した施設

1. 子供の村学園ムーバーンデック

カーンチャナブリー県にある児童養護施設で、1979年に設立されたNPOです。両親のいない家庭又は、貧困・家庭崩壊などで育児のできない家庭出身の子供たち約150名を預かっています。3歳以上の子供たちが、共同生活をしながら生きる術を学ぶ場であり、タイ教育省から認可を受けた学校でもあります。参加者は、川遊びや日本文化ワークショップでの交流、職業訓練ワークショップの一部として行われている木や竹の工作体験等から、子供たちの暮らしについて学びました。

2. タンマヌラック

カーンチャナブリー県にある施設で、仏教の精神に基づき、尼僧により2000年に設立されました。両親のいない家庭や育児のできない家庭出身の子供たちを預かっています。少年僧や少女の尼僧も学んでいます。タイ・ミャンマー国境地域で生まれた山岳少数民族(カレン族、モン族等)の子供たちが多くいます。今回は半日の訪問で、子供たちとの交流を行いました。

3. FORDEC(フォルデック)

フォルデックの創始者アムボン・ワッタナウォンは、孤児として、家もなく、食べるものも十分でない生活をしました。自分と同じ思いをさせたくないという一心で、困難を抱えた全ての人々に対する愛と心配りに自分自身の人生を捧げる決意をし、1998年にフォルデックを設立しました。今回は、サムットプラークカーン県にあるフォルデック・デイケアセンターを訪れ、センターに通う低所得者層家庭の子供たちと交流し、スラムの中に住む子供たちの自宅を訪問しました。



FORDEC近隣の(低所得者層の)子供たちの家庭訪問



FHCP前日、アイスブレイキングゲームで国境を越えて仲良くなるボランティアスタッフ



ラオスから参加したボランティアスタッフと自己紹介をする日本参加者(右)



タイ王国海軍司令官夫人臨席のもと開催されたFHCP2014開会式



FHCP創始者Visit Dejkumtorn氏による開会あいさつ



会場に到着した盲学校の子供たちを案内する日本参加者



「緑日」をテーマにした日本ブースを出展し、ゲーム等を通じ文化紹介をする



プロジェクト期間中、ボランティアスタッフは担当する施設を決め子供をサポートする

一般財団法人 青少年国際交流推進センター主催
国際理解教育支援プログラム



国際理解教育支援プログラムは平成16年より実施しており、内閣府青年国際交流事業の参加経験がある在日外国青年等を講師として日本の学校等に派遣して授業を行い、国際的な視野を持つ青少年の育成に貢献しています。平成25年度は7か所で計8回のプログラムを実施しました。

■平成25年度 第7回

日付	平成26年3月12日(水)
実施先	埼玉県所沢市立南小学校
担当者	増田英明校長、御菩薩池好行先生
対象	4年生(131名)
プログラム	「世界に目を向けよう」～大切にしているものは何ですか～
派遣講師	ジョン・ジフンさん(韓国) Mr. Hay Vanna(カンボジア) Mr. Jaime Mupas Collado, Jr.(フィリピン) Mr. Ahmed Elsayed Moustafa Hegab(エジプト)



■受入担当者の感想

所沢市立南小学校教諭 御菩薩池 好行

所沢市立南小学校は、明治7年に開校した前身の吾妻小学校から139周年、校名改称後、60周年を迎える学校で、校区の南側には「となりのトトロ」の舞台のモデルとなった八国山が広がり、約760名の児童が登校しています。本校では、4年生児童が総合的な学習の時間で「世界に目を向けよう」という学習をしています。「外国の人たちが大切にしていることやものは何か」をキーワードに、外国生活経験者から話を聞いたり、本やインターネットを活用して調べたりする活動を行ってきました。今回、これまでの学習のまとめとして、外国の方々と実際に交流ができないかと考え、一般財団法人青少年国際交流推進センターに授業実施の依頼をしました。親身に相談にのっていただき、本校児童の実態に合わせ、講師4名を派遣していただきました。また、当初は教室での外国人講師による国紹介のみを考えていましたが、外国の子供たちの遊びを通じた交流を提案していただき、1時間目は各国の紹介と質疑応答、2時間目は体育館での交流授業をすることができました。児童にとっては、外国の文化や生活習慣を知るだけでなく身体を動かした交流を通して、海外に対する関心を更に深める機会となりました。



エジプトの文化や教育について学び、日本との違いに驚く児童たち

■講師の感想

ジョン・ジフンさん(韓国)

私は今回初めて日本の小学校を訪問しました。韓国と似ていることも多いのですが、全く違うこともたくさんありました。印象的で驚いたことは、子供たちが集合や団体行動のとき、小学4年生とは思えないほど「秩序ある行動」をしていたことです。



韓国の教育制度や子供たちの生活の様子について多くの質問をする児童たち

小学校へ訪問する前は、「日本には韓国人が多く、地理的にも近いので、子供たちは既に韓国のことをよく知っていて、あまり興味がないのではないか」という不安がありました。実際に小学校で韓国について発表すると、子供たちは真剣に聴き、質問を積極的にして、韓国に興味を持ってくれたので、本当に嬉しかったです。発表では、「国際化のためには、まず自分の国のことを知るべきだ」と伝えましたが、子供たちが韓国の伝統的な遊びなどについて質問してきたとき、自分自身もまだ韓国について知らないことがたくさんあるのではないかと反省しました。

このプログラムは、日本の子供たちに外国のことや国際化に対する姿勢や考え方を教えるものである一方、講師として参加する外国人もいろいろ学ぶことができ、とても良い国際交流事業だと思いました。もっと子供たちと触れ合う時間があれば良かったと思ったので、次回は自分から更に積極的に接し、様々なことが共有できるようにしたいと思います。



カンボジアの教育制度についての話に熱心に耳を傾ける児童たち



フィリピンの子供たちの遊びを体験する児童たち

◆問合せ先

国際理解教育支援プログラム担当：田中 佐代子・大久保 正美 E-mail: iuesp@iyeo.or.jp Tel: 03-3249-0767

IYEOスリランカ教育支援プロジェクト One More Child Goes To School

笑顔の輪を広げよう ～子供たちに夢を届けよう～



日本青年国際交流機構(IYEO)の国際支援活動の一つであるOne More Child Goes To Schoolプロジェクトは、2008年に始動しました。

チャリティー・イベントを通じて学用品を提供するプロジェクトに加えて2010年からは、フォスター・ペアレンツ(里親)プロジェクトを開始し、2013年は、62名のペアレンツが69名の子供たちを支援しており(奨学金+学校修繕と学校備品支援)、毎年、子供たちからはペアレンツのもとに絵と手紙がプロジェクトメンバーを通じて届けられています。また、このプロジェクトの実現には、スリランカ現地での調整や支援、シンハラ語のレター(子供からペアレンツ宛)の英文翻訳等にスリランカの「世界青年の船」事業既参加青年の多大な協力があります。

2013年11月9日～17日には、プロジェクト・リーダーが、支援先であるスリランカ南部マータラ県ハクマナ地区のBuddha Jayanthi Vidyalaya小学校を訪問し、学校の依頼にもとづき、パソコン、プロジェクター、掃除用具、文具一式を贈呈したほか、4年生を対象に日本語と歌の授業を行いました。今年度もスリランカを訪問する予定です。

4月6日には、毎年恒例のチャリティー・ランチを東京都内のスリランカ・レストランで開催しました。

今年で6回目となるイベントには、IYEO会員のみならず、「スリランカ」、「教育支援」に関心のある仲間が30名以上集いました。スリランカ料理を楽しみながらプロジェクトの理解を深め、会話も弾みました。さらにスリランカ物産展等を行い、26,150円の寄付金が集まりました。また、プロジェクトに賛同する近畿地区実行委員会が、同日に、大阪でチャリティーランチを開催しました。



支援先の子供たちが日本語の授業を受ける



プロジェクト・リーダーより学用品等を提供する



チャリティー・ランチの参加者

フォスター・ペアレンツからの声

質問:ペアレンツになろうと思ったきっかけやペアレンツになってよかったことは何ですか?

■ Deblick 麻衣さん (アメリカ・シアトル在住 第11回「世界青年の船」事業既参加青年)

夫がかつて、スリランカでピースコーアとして働いていたので彼の熱い思いを聞き、一度も訪れたことがない国なのに、私自身も訪れたことがあるかのように、とても身近に感じていたからです。加えて、子育てを通して今まで以上に教育に関心を持つようになったことです。私はシアトルの市立図書館に勤務しており、毎日多くの子供たちが宿題のサポートを受けにやってきます。シアトルでもスリランカでも、学びたいと願うすべての子供たちが教育を受けられるように、私にできることを一つ一つ大切にやっていたいと思ったからです。そして、仲間が取り組むプロジェクトを全面的に支援したかったことも大きな理由です。アメリカという離れた場所からでも参加でき、とてもありがたく思っています。

■ 谷 江美さん (北海道在住 第34回「東南アジア青年の船」事業既参加青年)

2012年に娘が生まれました。たまたまこの日本という国に、そして私たち夫婦のもとに生まれました。しかし、同じ時代、同じ地球の上にも満足に病院にも学校にも行けない子供が数多くいます。子を持つ親という立場になってみて、これらの子供たちのために少しでも何かできることがあればしたいと思うようになりました。

このプロジェクトは、IYEOが全面的にかかわり、プロジェクトのメンバーが現地に行き報告をしてくださる等でとても身近に感じます。また、初等教育課程を修了するまでの5年間、継続して一人の子を支援し続けられることはとても良い仕組みだと思います。我が娘の成長に重ねながら、海を越えた彼の地で学ぶ彼女に思いを馳せ、更に娘もそこから多くのことを学ぶことを願うばかりです。実は、スリランカは今まで訪れたこともなく、あまり意識したことがなかったのですが、このような御縁を頂いて身近に感じるようになったことも、ペアレンツになってよかったことです。

■ 岡村 優子さん (フィリピン在住 2002年「国際青年育成交流」事業(タンザニア派遣)既参加青年)

高校留学時にカナダでフォスター・ペアレンツのことを知り、漠然といつかできたらなと思っていました。月日が経ち、良いタイミングでこのプロジェクトを知り参加しました。私自身ができることは僅かですが、献身的にプログラム運営をしているスタッフから届くメールでのコミュニケーション、本当に感触が伝わってきそうな子供たちからのエキゾチックな文字が並ぶお手紙や色彩あふれる絵などを見てスリランカと日本のつながりが深まっていくと感じるすてきなプロジェクトです。

プロジェクトに興味がある方は、以下のアドレスにお問合せください。

また、Facebookの「One More Child Goes To School」ページも併せて御覧ください。

スリランカ教育支援プロジェクト・チーム onemorechild@iyeo.or.jp

マクロコズムの表紙はスリランカの支援先の小学校に通う子供たちが描いています。活動の様子は、マクロコズムwebで一部報告しています。 <http://macrocosm.jp/> Vol.84 2009年2月/Vol.90 2010年5月

アジア太平洋経済協力 (APEC) 青年育成事業 APEC Voices of the Future 2013



平成25年10月に、インドネシア(バリ島)においてアジア太平洋経済協力(APEC)会合に伴う青年交流事業“Voices of the Future (VOF)”が実施され、APECに加盟する21か国から、地域の代表青年が参加しました。VOFは代表青年の交流により相互理解を促進すると同時に、アジア太平洋地域を代表するビジネスリーダーたちへのインタビューなどを通して、政治や経済に関する知識を深めることをねらいとしたプログラムです。

日本青年国際交流機構は、APEC Voices 2013 Working Committeeの協力依頼を受け、日本参加青年の募集と選考を行い、大河原友子会長(当時)を団長とし、青年2名を派遣しました。

プログラム

平成25年 10/2 (水)	オリエンテーション
10/3 (木)	開会式、基調講演、全体会、グリーンスクール訪問
10/4 (金)	バリの伝統文化体験、カマサン村訪問
10/5 (土)	APEC ビジネスシンポジウム傍聴
10/6 (日)	APEC CEOサミット傍聴
10/7 (月)	APEC CEOサミット傍聴、文化交流の夕べ、閉会式
10/8 (火)	帰国



APEC CEO サミットを傍聴



開会式にて参加者とともに

参加者の感想

第38回「東南アジア青年の船」事業既参加青年 川野 珠美礼

APEC本会議では、政治とビジネスがテーマだったこともあり、各国の首脳やビジネスリーダーが共に保守主義に走るのではなく、より開かれた市場を構築し、各国がそれに向けて協力していこうと口をそろえて言っていました。日本にいるとなかなか気付くことはないですが、一歩日本を出て周囲を見てみると、世界が感覚的に小さくなってきていることに驚かされます。

APEC Voices of the Futureのオープニングで行われたパネルディスカッションで、「近い未来、あなたの名前や国籍は聞かれず、あなたは何かできるの?と聞かれる日が来る」と、あるパネリストが言った言葉が今でも頭に残っています。これからの世界を生きていく若者として、世界がどういう方向に向かっていくのか、そして何が私たちに求められているのかということはこの会議を通じて考えさせられました。

今回、国際会議の場に立ち、APEC加盟国の若者と、若者の目線自分たちの考えや今後の世界について語った経験は大きな財産となりました。ここで得た世界感覚を、今後、自分が決断や判断をするときのナビゲーションとしていかしていきたいです。



筆者左から5人目

参加者の感想

第16回「国際青年育成交流」事業 (ドミニカ共和国) 既参加青年 吉永 恵

本事業に参加し、ある問題点に気づくことができました。それは、日本は技術協力やソフトパワーの面で世界に影響を及ぼしているにもかかわらず、こういう国際会議の場では日本人の存在感がとても薄いということです。この問題意識を持ち、せっかく日本を代表する青年として選ばれ、参加しているので、何かしらのミッション、つまり、国際社会における日本のプレゼンスの向上に役立ちたいと思いました。それで、数千人が出席しているAPEC CEO サミットにおいて2回ほど挙手して発言しました。大勢のCEOたち(安倍総理と(一社)日本経済団体連合会の米倉弘昌会長)の前で発言したときは体が震え、発言中に自分の顔が会場の全スクリーンに大きく映し出された時には直視できませんでした。会議全体から見れば、私の発言はほんの数分間にすぎないものですが、ここで勇気を持って一歩踏み出したことの意味は大きいと感じています。

将来は、「規範に基づく国際社会のルールを重んじ、人類社会が獲得した基本的価値を共にする、一人の日本人女性として、国際協調のもとで、世界に平和と、安定をもたらす、積極的貢献者」になるようにがんばりたいです。



筆者左

第1回薬物乱用防止についての 青年リーダーのためのグローバル・フォーラム



1951年に活動を開始した国際機関コロンボ・プランは、主として技術協力を通じてアジア太平洋地域諸国の経済・社会開発を促進し、その生活水準を向上させることを目的としています。日本は1954年にコロンボ・プランに加盟し、現在加盟国は26か国です。

近年は能力開発プログラムに取り組んでおり、「ドラッグ助言プログラム」では麻薬・覚醒剤防止対策活動に青年層を取り込むため、2002年からAsian Youth Congressを実施し(第9回は、2012年7月に大阪で開催)、アジア太平洋地域の薬物乱用防止を若者の間で啓発してきました。薬物の危険性は同地域に限られるものではないため、この度、コロンボ・プランが主催し、アブダビの国立リハビリセンター(NRC)と共同で、アブダビ(アラブ首長国連邦)において、世界中の若者を対象とした薬物乱用防止のためのプログラムを開催しました。Take Control, Lead the World(主導権を握り、世界をリードしよう)をテーマ

に実施され、参加者は世界45か国から大学生、メディア関係者、薬物乱用防止団体の代表者ら、259名でした。

日本青年国際交流機構では、外務省からの協力依頼に伴い、日本代表団員6名の推薦及び参加にあたっての準備サポートを行いました。



文化交流ナイトでの日本代表団の踊り

プログラム

平成26年 2/10(月)	開会式、全体会
2/11(火)	インスパイア・トーク、全体会
2/12(水)	分科会
2/13(木)	チーム活動、文化交流の夕べ
2/14(金)	振り返り、今後に向けて、閉会式



ソーシャルアントレプレナーシップのグループワークで紹介された、ビジネスモデル・キャンバスというフレームワークを使って、具体的な麻薬撲滅運動のアイデアを練る参加青年

■ 参加者の感想

この会議で私が感じ、学んだことは大きく三つある。

一つ目は、麻薬の世界的拡散について。世界の国々と比較すると、日本の麻薬中毒者はさほど多くはないと感じたのは、身近な麻薬の脅威を話し合うワークショップにおいてであった。各国代表の話を見ると、親族や友人が麻薬中毒患者である者が約半数ほどおり、彼らにとって麻薬は身近なものであった。麻薬の中毒性を考えると、一度中毒になってしまった者へのアプローチはかなり難しい。それは莫大なコストと時間のかかる取組であり、更生したとしても、またフラッシュバックを起こす可能性が高いからである。そのため、薬物乱用を未然に防止する取組が必要であり、まだ大きな問題となっていない今、日本は行動を起こすべきであると考え。一度薬物乱用が広まってからの取組は多くの困難を要するのである。

二つ目はムスリムの人々の宗教観についてである。この会議に参加した一つの収穫は、ムスリムの人々と宗教観について話し合う機会を持てたことである。UAE出身の青年たちは、イスラム教に関する偏見をなくしたいという想いから、どんな質問でもしてくれてかまわないというスタンスでいてくれた。最も心に残っている言葉は「私たちは特定の衣装を身につけなければならないし、毎日お祈りをしなければならない、婚前交渉も許されない。一見、とても窮屈で自由がないように見えるが、私たちの心は自由であるし、私たちがしたくて行っているものなのである」というものであった。この経験が私のイスラム教に対する偏見を払拭してくれ、彼らの文化をもっと知りたいと思わせてくれた。

平成24年度「日本・韓国青年親善交流」事業既参加青年 鈴木 良祐

三つ目は、日本の文化の世界におけるプレゼンスである。私が驚いたのは、日本の文化がアジアのみならず中東においても人気があることだ。中東の女性が日本のアイドルやアニメに熱狂し、毎週のようにドラマを見ている姿は正直想像できなかった。日本文化の広まりのおかげで、日本に興味を持つ青年はとて多く、日本語を勉強中の青年さえいた。日本は経済停滞や、人口減少などの問題を抱えており、経済的地位は今後下がるのではないかと予想される。そんな中でも、日本のソフトパワー政策は大きな成果を上げていると感じ、今後の日本の活路であるように思われた。

今後は、今回できた世界中の青年とのネットワークを絶やすことなく、いつまでも交友関係を維持したい。また、世界の青年と接する中で、自分の世界の諸問題に関する知識不足を感じたため、それが次の国際会議への課題である。しかしながら、どんな国の人とも分け隔てなく交友関係をつくることにおいて、能力の向上を感じ、内閣府青年国際交流事業参加から今までの国際交流の成果が表れているように感じたことも確かである。



第2回「青年の船」45周年 同窓会～「興奮」の2日間～

第2回「青年の船」同窓会事務局 片岡 明(1班・一般)

5年ごとに開催の同窓会は45年目を迎え、2013年9月26日(木)～27日(金)(出港日)に、思い出深い「国立オリンピック記念青少年総合センター+晴海埠頭」を会場に、107名の参加で開催しました。三島昌子副団長、古市正俊管理官、沖田哲也・高橋義雄両教官が高齢ながらも元気に出席されました。

集合後、これまで全国各地での活動・近況報告、まだまだがんばっているという元気をアピールしました。その後入室、入浴と、45年前のプログラムを「再現」。夜の同窓会総会と記念パーティーでは進行予定が混乱するほどの興奮状態で司会者は何もできず。再会で皆の顔は赤く上気、なんとも言えない心地よい雰囲気での再会でした。翌日、バスで「晴海埠頭」へ向かい、出港時に胸をときめかせた初心を振り返りました。最後に晴海客船ターミナルのホールを借り記念写真撮影、「青年の船」の歌の大合唱で同窓会を終えました。

次は50周年、「元気に全員集合」。



第3回「青年の船」44周年 福岡大会報告

実行委員長 豊田 和子

第3回「青年の船」は44周年を迎え、平成25年11月8日(金)～10日(日)、2泊3日で福岡県・長崎県・佐賀県を廻りました。

大会当日は、管理官の小玉正任先生(88歳)、教官の草川一枝先生(88歳)、管理部の太田英子様も元気なお姿で御出席いただき、また、今回は御夫婦での参加者が多く、全員で112名で遠くはカナダ、北海道、沖縄県等全国から来て下さいました。私共団員も65～70歳となりましたが、気持ちは昔の青年のまま、話ははずみ大いに盛り上がりました。

二日目は、太宰府天満宮にお参りして、九州国立博物館では特別な計らいで、ガムラン楽器を数多く出品していただき、さらに触れて、演奏もすることができました。九州は歴史、文化等東南アジアとのつながりが深く、いたるところで感じられました。

三日目は、佐賀県有田の窯元巡り、神埼の吉野ヶ里遺跡と廻りました。私共3回生は二年毎に同窓会を開催し今までに14か所を廻りましたが、その度ごとに友情も深まり、その絆はかけがえのない宝物です。今回も非常に良かったと、温かい言葉があちこちから寄せられました。次の2年後は東北大震災の復興支援の一助になればと、岩手県を中心に宮城県・青森県と決まりました。今から再会を楽しみにしております。



今月の表紙

スリランカ教育支援プロジェクト「One More Child Goes To School」の奨学生(5年生・女子)の作品。村に住む子供たちの多くは、この絵のような大きな庭がある家に住み、放課後は遊んだり、新鮮な野菜や果物の家庭菜園を手伝ったりしています。子供たちは、勉強と遊びのバランスが取れていて、自由時間が少ない都会の子供たちより健康で幸せです。



編集後記

いつも通っている図書館の図書貸出しシステムが自動化されました。これまで本を借りるときには「貸出カウンター」に並び必要がありましたが、今では、コンピューター前のテーブルに借りたい本を積み上げて、読み取り機にカードをかざすだけで、迅速に本を借りることができます。大変便利で、ますます図書館に行くのが楽しみです(ふ)

MACROCOSM 4月号 vol.106

2014年4月18日発行

編集 マクロコズム編集委員会

発行 一般財団法人 青少年国際交流推進センター
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町
2-35-14 東京海苔会館6階

TEL: 03-3249-0767 FAX: 03-3639-2436

e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

URL: <http://www.centerye.org/> (CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp/> (IYEO)

編集協力 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室
日本青年国際交流機構 (IYEO)

定価 210円 本体194円

印刷所 株式会社デックス

TEL: 03-3400-8089 FAX: 03-5469-5270



あなたにもっといい旅。

夏休みのご予定はお決まりですか？

IYEO会員限定 海外パッケージツアー 5%割引 実施中!

**JALパック 通常コース5%、JALパックスペシャル4% 割引
トップツアー-CUTE 5% 割引**

期 間：6月～9月末ご出発まで

- ◎その他、上記以外の海外パッケージツアーでもお問い合わせください。
(一部未取扱いのパッケージツアーもございます)
- ◎トップツアーの国内パッケージ「トップツアー-CUTE」も5%割引します。
- ◎一部2.5～4%割引のコースもあります。

お申込み先：
 国際旅行事業部 ストリームライン新宿支店
 〒160-0023 東京都新宿区西新宿7丁目5番25号西新宿木村屋ビルディング16F
 TEL 03-5348-3500 / FAX 03-5348-3799
 担当：米田 匡・鈴木 真実 E-mail: tadashi_yoneda@toptour.co.jp
 営業時間：月～金 9:30～18:30 休業日：土・日・祝日



出逢い、発見、そして感動。

トップツアー株式会社

<http://www.toptour.co.jp>





撮影：三好 和義

緑が輝き、風薫る季節へ

きらめく日差しのもと、勢いを増す緑。海を渡る風も爽やかに感じられます。
日本の美しい季節を訪ねる旅に、にっぽん丸がご一緒します。



○詳しいシフレットをご用意しています。最寄りの旅行会社または、下記へお問い合わせください。

商船三井客船 クルーズデスクフリーダイヤル 9:30~17:00(土・日・祝はお休みです) 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル5階
☎0120-791-211 <http://www.nipponmaru.jp>